

20 世紀前期における実業青年の進路動向

——旧制彦根高等商業学校生における就職と転職——

滋賀大学大学院 今井綾乃

【目的】

本報告は滋賀大学経済学部の前身である旧制彦根高等商業学校（以下、彦根高商、と略記。）の生徒における就職と転職の動向を明らかにする。

高商生めぐっては、これまで特定の期間や一部の生徒に基づき検討されてきた。また、20 世紀前期における高商生の転職について、その様子が示されたことはない。本報告は彦根高商が制度上、存在していたすべての期間にわたって、同校における本科生全員の就職と転職の動向を追跡する。

【方法】

本報告は次の 2 つの資料を主に用いる。1 つ目は 20 世紀前期、各教育機関がほぼ 1 年に 1 度、基礎的な情報を載せ発行した『学校一覧』である。公的な資料である彦根高商の『学校一覧』は、複製も含めてすべて滋賀大学経済経営研究所に現存する。それらのうち 1926 年～1934 年に発行された『学校一覧』には、卒業生の発行時の勤務先や在学先等が記されている。2 つ目は彦根高商の同窓会組織がほぼ 1 年に 1 度、発行した『陵水会員名簿』である。同校が開校していた期間のうち、1927 年～1946 年（1943 年～1945 年は未発行）のものが同所に現存する。それらには卒業生の発行時の勤務先や在学先等が掲載されている。これらを使い、彦根高商生の就職と転職の動向を 1946 年までたどる。

【結果と結論】

彦根高商生の進路動向について、ここでは大まかな傾向を述べ、当日の報告で具体的に提示する。彦根高商生の就職率や彼らが就いた業種を卒業年別にみると、それらは景気変動や産業の消長にそって変化していた。そのなかで変わらなかったことは、どの年も約 1、2 割の生徒が「江州系企業」へ就職したことである。また、彦根高商生全体をみわたしたとき、彼らが最も就職した企業は「江州系企業」の 1 つである丸紅商店であった。同学年の生徒が同一企業に集中して就職することが少ないなか、丸紅商店にはほぼ毎年、複数名の生徒が就職した。そして、彼らのうち滋賀県出身者が採用される傾向にあった。「学校縁」（菅山、2011）を支えに、彦根高商と「江州系企業」は結ばれていたのである。その関係は「江州系企業」の経営陣や地域の人々が、高商を彦根へ誘致するために必要な寄附金を捻出したときから始まっていた。その恩恵を受けて「江州系企業」へ就職した生徒は、おおむね各企業で定着した。彦根高商の卒業生は、1946 年までに半数以上が転職を経験した。彼らは卒業 5 年以内に 1 度目の転職をする傾向にあり、また、1 度転職した者は約半数が再転職した。なお、転職時期に傾向はみられなかった。彼らが転職した業種や場所に着目すると、その動因の 1 つが推察できる。それは経済の拡大が見込める場へ行こうとする意志であった。彼らの多くは前職と異なる業種へ、とりわけ工業系企業へ転職する傾向にあった。また、卒業生のなかには外地に新設された企業へ転職したり、前職を捨て外地で自営したりするなどした者がいた。社会の変化のなかで彦根高商生の多くは新天地を求め、動いていった。

主な文献

天野郁夫（1978）『旧制専門学校』日本経済新聞社

小倉栄一郎（1978）「全国江州系企業調査」『研究紀要』滋賀大学経済学部附属史料館、第 14 号

菅山真次（2011）『「就社」社会の誕生：ホワイトカラーからブルーカラーへ』名古屋大学出版会

長廣利崇（2013）『高等商業学校の経営史』有斐閣